



ジムトレーナーの
陽キャイケお兄さんに

性癖バレ

してセフレ堕ちかと

思ったら甘々クリ責め

されて溺愛ルートに

入っちゃった話

「うわっ、あおいさん！？ めちゃくちゃ可愛い！ あ、俺大和です、普段はジムトレナーやってます。今日はよろしくお願いします！」

「はっ、はいっ……よろしく、おねがい、します……！」

会って早々、声の大きさとテンションの高さに肩を縮こまらせる。こんな根暗で陰キヤなわたしに、こんな陽キヤの明るそうなお兄さんが、どうして来てくれたんだろう。

ニコニコと人の良さそうな笑顔で隣から顔を覗き込んでくる、この人は大和（やまと）さん。明るい髪ときりっとした大きな瞳が印象的で、まるでどこかの俳優さんみたいに格好いい。

マッチングアプリで知り合って、何度かメッセージを交わすうちに一度会ってみることになった人、なんだけど……。

「あおいさん、甘いもの好きってプロフに書いてましたよね？ この駅の近くにふわふわのパンケーキ屋があって」

「そう、なんですネ……！ いってみたい、です」

「良かった！ じゃ、行きましょ！ あ、敬語なくてもいいですよ。俺も多分すぐ取れちゃ

うんで」

声が大きくて背も高いから、フレンドリーさも相俟って引っ込み思案なわたしはつい怖気付いてしまっている。

でも、大和さんはそんな様子を気に留めることもなく、人ごみでもたつくわたしにさり気なく壁になってくれた。明るい顔で、良ければどうぞ、と腕に隙間をあけている。

——悪い人じゃないのはわかる、かな……。

勇気を出しておずおずと腕に捕まると、嬉しそうに笑ってくれて少しホッとした。

「んん、やつぱここのストロベリーパンケーキがこっちばん美味いんすよね〜！」

「ふふっ…大和さんも甘いもの、好きだったんですね」

「バレちゃいました？ いやあ、普段は我慢してんですけどね」

あっけらかんと笑う大和さんに初対面とは思えないほど打ち解けてしまう。陽キャのオーラが眩しいけれど、意外にもゲームやアニメも好きみたいで、わたしが好きだと書いたアニメの話で盛り上げてくれた。

「いや面白かったあれ！ でも最後の展開だけちょっと物足りなかったんだよねあゝ」

「え、あつ、わ、わかります……！ ちょっと尻すばみ気味で……じゃああの子はこのあとどうなっちゃうの！？ みたいな……」

「ほんとにそれ！ え、それで解決なのかよ！？ みたいな」

「そうっ！ そうなんですよ、主要キャラなのにその扱いはちょっと……あ！ でも原作でちょっとだけおまけ漫画があつてですね、そこに、えっと……」

つい熱く語ってしまつて恥ずかしくなりながらも、大和さんはどれどれ？ と出したスマホを覗き込んでくれて嬉しくなる。

漫画のアプリを出そうと思つて慌ててスマホを開くと――

ああん♡ クリしこしこやめてえ♡ 乳首も一緒にするのだめ♡♡ イくイく、イっちゃ
うううっ♡

「へ……っ」

操作を間違えて、昨日見ながらひとりできていた漫画が、思い切り表示されてしまった。すぐに隠して誤魔化せば良かったのに、頭が真っ白になったわたしはあろうことかしばらく固まってしまい――まじまじと画面を見られてしまう。

はっとした瞬間にはもう遅く、にやにやした大和さんがこちらを見ていた。

「ふーん、あおいさんって……こういうのが、好きなんだ？」

「ちっ、あつ、ちがいます、すみません忘れてくださいっていうかもう帰ります時間使わせちゃってすみませんでしたっ、ひゃっ」

「ごめんごめんごめんごめん！ 俺が悪かった、悪かったから一旦座ろ！？」

あまりにも恥ずかしくて席を立とうとすると慌てたように肩に手を置かれて動けなくなる。

恥ずかすぎて顔から火が出そうになってきたし、泣きそうにもなってきた。

「……ほんとに、ううっ、忘れてください……っ」

「いやっ、あおいさん……恥ずかしいのは、そうだと思うんですけど！　でも、正直俺はそういうところもいいなって思うっていうか……！」

「なにがですかあ……」

「えーっと、ほら、そういうことに積極的な人とそうでない人だったら、俺は積極的な方が嬉しいんで……だから、普通にいいなって」

「……そういう目的で会ったわけじゃ、ないですけど」

「もちろんもちろん！　そうだと思うけどさ、まったく興味無いって人よりは、ある方が嬉しいから！　まあその、俺も……この子可愛い！　付き合えたら嬉しいなーと思って、アプリやってたし」

「……そういうもの、ですか……？」

なにか一生懸命に説得されているのも含めて、だんだん肩の力が抜けてきてしまった。こんな恥ずかしいところを見せてしまったんだから、もう何を言っても変わらないかもしれない。

「……でも、そもそもわたし、男の人と付き合ったことも、なくて」

「え！？　こんな可愛いのに!？」

「そんなことないです……友達少ないし、会話とかヘタだし、オタクだし……それに、こんなえっちな漫画ばかり読んでっ、多分もうこじらせてるっていうか……!」

「待って待って泣かないで!？」

感情が昂って涙が出てしまう。慌てた大和さんが袖で涙を拭ってくれた。

……優しい。

何もかもうまくいかないわたしに、こんな優しくしてくれて、本当にいい人だなと思う。

「ありがとうございます……そんな自分を変えたかったですけど、難しいですね、やっばり」

「……そう？　俺は、難しくないと思うけど」

「へ？」

「変わるよ。こうやって」歩踏み出して、ちゃんと自分のことを伝えられるあおいさんなら」

「ふえ……?」

袖から手が伸びてきて、机の上に所在なく置かれたわたしの手に重なる。ビクつくわたしを安心させるように、やさしく撫でられた。

さっきまでとは違う、どこか緊張したような真剣な表情で、大和さんは言った。

「あのさ……試して、みない？ 俺と」

「えっ……」

「俺、あおいさんのイヤなことは絶対しないし、だからその……予行練習、的な感じだと思ってる！」

「え、えっ、」

「あ！ もしろん、あおいさんが既にイヤ！ とかいやまだそういうのは……って思うなら全然！ 全然大丈夫なんだけど……」

「はっ……えっ……あ！ 待つ……て、ください」

照れたように手を引っ込めようとした大和さんの手を、ぎゅっと掴む。
驚いた大和さんの目をしっかりと見つめ返す。

こんな風に言ってくれる人ならきつと、大丈夫だと思う。わたしは覚悟を決めて、言った。

「あの……わたし、すごく安心しました。大和さんみたいな人だったら大丈夫かも、って」
「えっ！　ほんと?!」

「はい！　だから、ぜひ、お願いします。わたしと……行きましょうつ、ホテル！」

「……………んっ？」

「えっ？」

「……………ホテルう?!?!?」

「お付き合いの予行練習のつもりで言っていたらしい大和さんが大声で叫んだので、私たちは脱兎のごとくカフェから出たのだった。」

目の前に、リゾート風の白い建物が建っている。もちろん見たことも、入ろうとしたこともない。

ごくりと唾を飲み込み、ショルダーバッグの紐をぎゅっと握る。

あれから、とんでもない勘違いをしてしまった恥ずかしさに逃げ出そうとするわたしを大和さんが引き留め、説き伏せること15分。

何を言われたっけ。ホテルでもカラオケでもどこでもいい、行きたい場所に付き合うし、あおいさんのイヤなことなものもしない、だから帰らないで！……みたいなことだったと思う。

恥ずかしさが天元突破したわたしは、売り言葉のように、じゃあ本当にホテルでも付き合ってくれるんですか、なんて言って、しまってた。

いいよ、でも中を見るだけにしようか、という言葉に頷くしかなかったのだった。

「休憩……あ、二時間ある、二時間でいいよな？」

「休憩……？ ホテルなのに……？」

「……宿泊で取っても俺はいいけどね？」

「そういうことじゃないですう……」

休憩があるなんてことも知らなかったので、ちょっとだけ拗ねてみせる。笑いながらごめんごめん！と頭を撫でられた。

やっぱり大和さんは少し慣れた素振りがあるから、こういうところもたくさん行っているんだろう。

このままセフレみたいになって、わたしの処女も散ってしまうんだろうか……。自分で行きたがったくせにそんなことを考えてしまっ、ふるふると首を振り、いざ中に入る。

見慣れない、誰もいないフロントにきよきよとしていたら大和さんがどこからか鍵を持ってやってきた。どうやって取ったのか聞くタイミングを逃したまま、エレベーター

に乗り込む。

四人乗ったらぎゅうぎゅうになりそうな、狭いエレベーター。

落ち着かずにそわそわしていると、後ろからそっと髪の毛を掬われた。

「ひゃっ……」

「……ごめん、イヤだった？」

「へあつ、いえ……あの、はずかしい、だけで」

「そっか、……いい匂いするなーと思って」

「えっ、でも、わ……わたし……なに、も、つけてなくて、」

「じゃあ、あおいさんの匂い？　これ」

髪の毛に鼻先を埋められて、恥ずかしくて肩を縮こまらせる。

と、音がしてエレベーターが目的の階についたみたいだった。導くように手を取られる。

「あ、ありがとうございます……！　あ……廊下は、ふつうのホテルみたいですね」

「ね、綺麗。部屋も綺麗らしいよ、……ほら」

「わぁ……………！」

扉を開いた瞬間、少しわくわくしてしまった。

リゾートホテルのような大きなベッドと、大きなテレビ。窓からは街並みが綺麗に見える。

エレベーターの時に気づいたけれど、どうやら最上階を取ってくれたみたいだ。部屋ももっと小さな部屋を想像していたけれど、想像以上に大きい。

気を使わせてしまったみたいで申し訳なくなる。

「あの、すみません、こないだお部屋…」

「全然！ 俺もここは初めてだし……あ、これ知ってる？」

「これ？」

「あおいさん、ここのスイッチ押してみて」

言われるままにスイッチを押すと、バツという音とともにバスルームの壁が透明になる。

「きゃっ!?! なんですかこれ、丸見えじゃないですか」

「はは! 俺が入つてるとこ見る?」

「何の意味あるんですかそれえ!」

たわいない会話をしながらも気になって中を覗き込む。また大和さんが謎のスイッチを押してくれて、突然浴槽が七色に光り出す。

「無駄機能すぎません!?!」

「それはほんとにそう」

二人で笑い合いながらベッドに戻る。どうしてもやりたくなって、ばふ、と飛び込むと、大和さんが天蓋をおろしてくれていた。

「わあ……………」

「あおいさん、お姫様みたい」

寝転んだままのわたしの隣に腰掛けて、乱れた髪を梳くように整えてくれる。

こんな情けないお姫様はいないと思うけれど、優しい大和さんにエスコートされてはいるのかもしれない。

「じゃあ、大和さんが王子様ですか」

「……、……あおいさん、ちょっと、……もう」

口籠っている大和さんがなんだか意外で、また何かへんなことを言ってしまっただろう
か……と思った瞬間に、手をシーツに縫い付けられた。

真っ白な天蓋とベッドの中で、大和さんの顔しか見えなくなる。

見惚れるほど精悍な顔つきだけれど、今は少し怒ってるような、照れているような。

「あのさ……そんなスキ多くて、アブリやったらダメだって」

「……？」

「王子様のフリした悪いオオカミがいるかもしれないでしょ？」

「……そう、なんですか？」

「そう。こうやって、食べられちゃうよ」

覆い被さった大和さんの唇が額に重なる。

言葉とは裏腹に、ちゅ、と優しく吸い付いて、すぐに離れていくだけの。

「んっ、……でも、わたし、そういう……つもりで、」

「え？」

「あっアプリやったのは、そういうつもりじゃないですけど……その、さっきは」

「……うん」

「そういうつもりで、言いました。ホテル、行きましょう、って。……大和さんになら、いいと思って」

ごくりと、大和さんが唾を飲み込んだ音が聞こえた。

先程までのトーンとは違う、低くて掠れた声で、触っても、いいってこと？ と聞かれる。

「わたしの……イヤなことは、しないんですよ？」

「しないよ」

「じゃあ……ちょっとだけ、予行練習、してもらえませんか……？」

しっかりと視線を合わせて言った。大和さんの綺麗なアーモンド形の目が瞬く。額を合せて、嫌だったらすぐ言って、と囁かれた。

少し怖いけど、きつと大丈夫。小さく頷いて、自分から大和さんの手に指を、絡めた。

「ひ、うう………っ♡　そこ、ばっかり、やあ……っ♡」

——気付けばわたしは興奮しきって、ぺたりとベッドに座り込み、目の前の大和さんに

差し出すように胸を突き出していた。

見せるのが恥ずかしい、と言ったら、服の上からにしょっか、と言われて。でも、ブラジャーは取られてしまっ

て。薄いニット越しにぴん♡と勃起した乳首を撫でさすられて、もうどれくらい経ったかわからない。

すりすり、すりすり♡

くりくりくり♡ こすこすこすこす…♡

「…ほんとに、嫌？」

「あ、んあ、あ…♡ うう…♡ つや、じゃ、ない、です…♡」

嫌だって言ったら、大和さんは手を止めてしまう。

そう思うと否定せざるを得ないんだけど…恥ずかしい。こういうことをするのが普通の恋人同士、なのだろうか。

大和さんの手は止まることなく、まるでちゃんと言えたことを褒めるように、わたしの

おっぱいの先端をぴん♡ ぴん♡ と、弾いてくれる。

「はっ、あ、ん♡ ううっ♡」

「あおいさん……恥ずかしいって言ってたけど、服の上からでもわかるようになったね」

「やあ、……っああ！♡ うう、見ちゃ、だめです♡」

「見なくてもわかるよ？ ほら」

汗ばんだ上に、すっかり勃起して透けて見える乳首を爪先でかりかり♡ といじめられて腰が揺れてしまう。

こりこり♡ かりかり♡

すりすりすりすり……♡

「あう、ん、ふ……っ♡ それ、ダメえ……っ♡」

「嫌じゃないんだよね？」

「いっ……や、じゃ、っああ♡ あ♡ うう……っ♡」

「何でダメ？」

すりすり♡

すりすりすりすり♡

もどかしいほど優しい刺激が断続的に続いて、今まできちんと鍵をかけていたはずの籠が徐々に外れていく。

媚びるように腰をくねらせて、もっとしてほしいと胸をすり寄せてしまう。

「くく…きも、ち、いい、から…っ♡」

「……あおいさん」

大きなため息のようなものが聞こえて呆れられたかと肩をびくつかせると、呆れたにしては熱っぽい瞳でこちらを見つめる大和さんと目が合った。

「あ、？ えっと、すみ、ませ…っ」

「俺だって精一杯抑えてるんだから、ダメだって、もっ……」

「へ……？」

「まあいいや、……てか、あおいさんさ」

「は、はい……っ？」

「素質あるでしょ」

なんの、と聞く前にきゅっ！♡ と強めに乳首を摘まれて頭が弾ける。

「あっ♡ ひいんっ♡ や、まと、さ……だめ、だめえ♡ ちくび、きゅってするの、あゝ♡ やめ、てえ♡♡」

「気持ちいいんですよ？」

「きもちいい♡ ばいからあ♡ あたま、へんに、っああ♡♡♡」

かりかりかり♡

きゅ、くりくり♡ くりくりくり♡

快感にばちばちと頭が痺れて腰がへこついてしまう♡

「乳首、自分でもいじってた？」

「いじ、って♡ ましたあ♡♡ ごめん、なさい♡♡」

「へえ……一人でこんなピンピンの恥ずかしいエロ乳首になるまでしこしこしてたんだ？」

「あ♡ ごめ、なさあ、ああ♡ だめ、だめ♡」

ろくな抵抗もできないまま、肩からニットをおろされそうになる。

見られるの、恥ずかしかったし、今も恥ずかしい。なのに……♡

「……ほんとに、ダメ？ ちゃんと見せてごめんなさいしないとじゃない？」

「……っうう……、……は、い……♡ ごめんなさい、します……♡♡」

きつと、ほんとにダメって言ったら大和さんはすぐにやめてしまうから、恥ずかしさを堪えて頷く。

じわじわと追い詰めるような言葉遣いをされて、気付いてきた。わたしは確かに、ㄥの氣質がある……んだと思う。けれど、それと一緒に。

……大和さん、のなんだ。

恥ずかしさに震えながら、ぺろ♡ とニットを下げて、大和さんにわたしの恥ずかしいおっぱいを見てもらう。

大和さんの視線がおっぱいに注がれて、空気に触れた乳首がひんやりとして…それだけでむずむずと腰が揺れてしまった。

「ごめんなさい、できる？」

「えっと、……はい、します、♡」

「ん、出来たら触ってあげる」

「はいっ……え、っと、……ひ……ひとりで、いっぱい、触って……♡ え……えっちな、おっぱいにしちゃい、ました…っ、ごめん、なさいい……っ、っあ♡」

言い切った途端に、大和さんの指が直接触れる。こすこす♡ と、甘やかすように擦られながら、いい子だね、と囁かれて甘い息が零れた。

ご褒美というように、大和さんの口が胸へと近づく。

れろ♡ ちゅうっ……♡
ちろちろちろちろ♡

「あ、あ♡ ぐん♡ だめえ、ああ、きも、ぢ、い♡♡」

片方は爪先でかりかり♡ といじめられて、片方はちろちろ♡ と舐められて…頭がバカになりそうなほど気持ちいい♡

ひとりでするのと、全然違う♡ こんな味わったら、戻れなくなっちゃう……♡

かりかり♡ こすこすこすこす♡
れろれろれろ♡ つんつん♡ ぢゅううう……っ！♡♡

「あ、あっ……！？ やっ、待っ……てえ、ひ、ああっ♡ わ、たし……っへん、あっ♡
だめえ♡ うう♡ や…っまと、さ、きもちいいの、だめえ♡♡」

腰がへこつくの止められない♡

乳首だけでイくなんて情けなさすぎるのに、このままされたら……！

そう思うのに、大和さんは全然やめてくれなくて、思わず私の胸に埋まる大和さんの頭を抑えるように手を添えてしまった。

「……ん、やだ？ これ」

「うう…っイヤじゃ、なくて、……♡ その、いつっちゃうかも、しれ、なくてえ……え
あっ！？♡ ああ♡ やめ、……♡♡♡」

頑張って恥ずかしすぎる本音を言ったのに、間髪入れずに続けられてしまう。

ビンビンに反応しきった乳首を濡れた舌尖でこりゅこりゅと転がされて、もう片方は相
変わらずかりかり♡ かりかり♡ と、一定の刺激を送られ続ける。

激しく無理やりイカさるわけではなくて、ずっと、わたしの本気イキを待つ、みたいな…
♡

かりかり♡ すりすりすり……♡
れろれろ♡ こりゅこりゅこりゅ♡

「はっ、ああっ、ああ♡　だめ、や、まとさあんっ、それ、ああ♡♡　かりかり、だめえきちゃ、ううっ♡」

おっぱいのさきっぱから、じわじわと熱がおまんこへと溜まって、つらい。抵抗したいのかイきたいのかもわからない。

わたしは大和さんの頭を抑えるように掴んで、背筋を仰け反らせた。

「~~~~っ、うう♡　も、っだ、めええ……っあ、ああ♡　イ、~~~~っ……♡♡♡」

びくびくっ！　と身体が震えて絶頂の余韻に浸る。

乳首だけで、イっちゃった……♡

はっ、はっ、とまるで犬のような息を漏らして気持ちよさに浸っていると――

「っ、きやうっ！？♡」

いつの間にかスカートの中に入っていた大和さんの手が、無防備にも開いた足を中心、おまんこへと当てられていて。

パン！♡ と、ショーツの上からおまんこを弾くように叩かれてしまった。

……え？ 痛く、ない、気持ちいい♡ なん、で……？♡

「ダメだよ、あおいさん。いくときはちゃんとイきますって言おうな」

パン！♡

「ひいいん♡ ああ♡ ごめ、なさあ、い♡」

許して欲しくて大和さんを見上げると、会った時のような柔和な表情とは違う、興奮しきった顔をしていた。まるでこちらを獲物として見るみたいな……オスの、顔。

ぞくぞくと背筋が粟立った。

唾を飲み込んで、媚びるようにおまんこを大和さんの手にすり寄せる。へこ♡ へこ♡ と腰を振り、メス媚びしてしまう。

「ちゃんと、言えますっ、言えます、から、♡」

「…言えるから？」

「やめ、ないで…♡ もっと、さわって、ください…っあ、ひ、いんっ…♡♡」

パンツの上でもわかるくらい、ぷっくりと勃起しているクリトリスをすり…♡ と撫でられる。

それだけで気持ちいい♡

もっとすりすりして欲しい♡

「好きだよね？ クリしこしこされんの」

すりすりすり♡

こすこす♡ こすこすこすこす♡

パンツの上から爪先で何度も往復されるの無理っ♡

恥ずかしさも忘れてこくこくと頷いて、もっともっと♡
と言うように膝立ちになって、

大和さんに抱きつく。

片手でそっと抱き返してくれる一方で、もう片方の手は変わらずにずっとクリトリスをすりすりされる。

「あっ♡ う♡ は、いい……っ♡ すき、です、くり……しこしこ♡ ああっ♡ それ、きもちい、♡」

「自分でずっとしこしこしてたもんね？」

「やあっ、あ♡ 言わ、ないでえ♡」

かりかりかり♡

すりすり♡ すりすりすりすり♡

自分でするときよりも弱い刺激で、ずっと手加減されたまま追い詰められる、みたいな感覚。

もう、こんなの、絶対戻れない♡

「ほんと、恥ずかしいね？　ここ、一人でいじってこんな大きくしたんだ。ちんぽみたい
に勃起してんじゃん」

「びゅっ、ごめ、なさ、あ♡　う♡　まいにち、いじってましたあっ♡」

「…どうやって？」

いつの間にか屈んだ大和さんに耳元で囁かれて、びくっ…♡　と身体が震えてしまう。
どうやって、って、そんなの…。

逡巡している間にも、大和さんはカリカリを止めてくれない。気持ちよくて、どんどん
バカになってしまう♡

かりかり♡　くりくり♡　くり♡

こすこすこすこす…っ♡

「いま、みたいにい♡　ひう♡　パンツのうえ、から♡　くりとりすをつ、お、ああっ、あっ♡」

「…うん、パンツの上から？」

「うらっ、うらすじをお♡ したから♡ っっあ…♡ ん♡ つめ、で、かりかりして、あ♡ う♡ あっ、っっ…♡♡」

言えば言うほど、言葉通りに裏筋を、下から優しくかりかりしてくれる。甘やかされてるみたいな刺激に感じ入ってしまう。

かりかり♡ すりすり♡
ぬちゅ…♡ かりかり…っ♡

乳首を弄られていたときから溢れていた愛液がとうとう大和さんの手に伝ってしまった。ダメ、これ無理♡ ぬるぬるの手でカリカリされるの一番ダメ♡

「あーあ、俺の手ぬるぬるになっちゃったよ？」

「ごめ、なさっ、ああっ♡ あう♡ はじく、の、だめええっ♡」

また叱るようにぴん♡ と弾かれて身体が仰け反る。

自分ではしたことがない強い刺激でやめてほしいはずなのに、どこか待ちわびているわ
たしもいる。

「こんなぬるぬるしてたらカリカリでなくなっちゃうじゃん」

「や♡ やあ♡ いや、です…♡」

目を潤ませていやいやと首を振る。嫌がるタイミングそこ？ と笑われてしまつて恥ず
かしい。でも、大和さんはまた指の動きを再開してくれた。

かりかり♡ こちゅこちゅ♡

しこしこしこしこ♡♡

単調な動きなのに確実に追いつけられる♡

「あ♡ あ♡ あ…っ♡ や、まと…さん…っわ、たし、また、イっちゃ…っ♡」

「イクときは？ どうするんだっけ？」

「ひう、んん♡ えっと♡ イきますっ、て、」

「そ、おまんこイきますって言おうな？」

「ひっ♡ うう♡ は、いゝっ！♡」

恥ずかしい言葉を吹き込まれてそれだけでぞくぞくと背筋が震える。

激しくなるかと思っただけれど、そういうわけではなくて、変わらなかり♡ と爪
先で擦られるのを繰り返されて、徐々に追い上げられる。

ぬりゅぬりゅ♡ すりすり♡

かりかりかり♡♡

「あ、あっ……っ♡ つく、ううっ♡ や、まと、さ……イ……っ」

「んー？ 何？」

「うう♡ も、おっ、おまんこ、イっちゃい、ますう……っ♡♡」

「ん、いいよ、イって。クリトリスカリカリされておまんこイクイクするところを見せて？ あ
おいさん」

「ああ、あっ♡ ばい♡♡ イくう、あっ♡ おまんこっ、おまんこイき……ますううっ、
——っ♡♡♡♡」

ビクビクビクッ！！ と身体が跳ねて絶頂に浸る。気持ち、いっっ♡

うっとりと余韻に呆けていると、悪戯をするようにイッたばかりの敏感なクリをカリカリッ♡ と撫でられて腰が浮いた。

「ひいんっ、…っ♡♡ 大和さ…っいま、だめですう♡」

「ダメ？ 上手にイけたからご褒美あげようかなって思ったんだけど」

「ううっ、いま、びんかん、だからあ…っ♡」

ご褒美、の言葉に腰が震える。ダメだから震えているのか、期待で震えているのか、自分でもわからない。

と――

ピピピピッ！！

大和さんがかけていたらしい、アラームの音が鳴った。うそ、もう二時間経つの……？

びっくりして固まっている私から手を離して、大和さんがアラムを止める。

「にじかん…もう、経ったんですね…」

「……うん、あー……あと五分くらいで出ないと」

「そう、ですか」

「……これで終わりにしとっか、あおいさん。身体だけパパッと流してくる？ 気持ち悪いでしょ？」

さっきみたいなの、興奮した様子は身を潜めて、タオルでわたしの顔の汗を拭いてくれる大和さん。

最初のときみたいなの……こんなわたしにも優しくしてくれる、明るいお兄さん。

「……社会勉強に、なった？ これ。思ったより激しくしちゃったな……あおいさん可愛くて止まんなかったわ、俺」

ごめんね、とどこか遠慮がちに笑う大和さんの手を、わたしはぎゅっと握った。

「あの……イヤ、です」

「……んっ？」

「大和さん……わたしのイヤなこと、しないんですよね？」

「うん？ もちろんもちろん！ ん？ どういう……」

「私の行きたいところややりたいこと、どこでも付き合ってくれるんですよね？」

「そっ、うだけど、え何が!？」

「これで終わりなの、イヤです」

驚いた表情でこちらを見る大和さんが、だんだんと状況を理解して真剣な瞳になっていく。

「続き、教えてください、……布越しじゃなくて、ちゃんと」

「あおいさん、……」

大和さんがわたしの頬を撫でる。すり、と擦り寄った。

静かな部屋に、大和さんが唾を飲む音が響いた。